合唱と私

コンクールの功罪は？

清水　脩

私がはじめてコンクールに出たのは、大阪外語（現大阪外語大）グリー・クラブにいたときである。二年生の秋、関西のコンクールで、たしか三位になった。三年生のときは私が指揮して出たが、入賞しなかった。こんな状態だったから、あまり印象にのこっていない。

その時から十五年ほどの年月が流れ、私は東京に出て作曲の勉強をしていた。根が合唱ずきだから、合唱からいっときも離れなかった。神奈川県の川崎にあったマツダ混声合唱団（東芝）を指導していた。

昭和十六年十二月八日。ご存じの開戦の日の夜、私はメンバー三十人と一緒に、神宮外苑の日本青年館の舞台に立ち、賞状と優勝盃をうけた。その年の秋、ラジオでおこなわれた勤労者の合唱コンクールで優勝したのである。当時は職場といわずに勤労者といった。優勝がきまったのは十二月八日より前であったので、祝賀会で飲めぬ酒をメンバー一人一人からうけ、正体もなく酔いつぶれて、下宿へかつぎこまれたのを覚えている。多分、生まれて初めての酒量であった。今も酒は飲めないが、コンクールというとその時の酔態を思い出すほどの経験であった。

その後、戦後間もなく、ある女声合唱団を率い、あるいは東京男声合唱団で合唱連盟のコンクールに参加したりした。東京男声合唱団のときは一般の部で三位にはいった。以来指揮者としてはコンクールに出ていない。

しかし、合唱連盟の創立当時、主事をしていたので、コンクールには以来二十数年ずっと関係してきた。

主催者側にあって、事務いっさいをひきうけたり、理事長として、さいはいを振ったり、審査員になったりで、コンクールの内と外とのさまざまの事を経験してきた。課題曲募集に応じて入選し、作曲家としてのよろこびを味わったこともある。なかでも、今では「月光とピエロ」と題した組曲になっているが、この組曲の第二曲「秋のピエロ」が入選し、今も男声合唱曲の「古典」などと言われているのなどは、私とコンクールを結びつける大事件の一つである。その後も、課題曲募集で入選した「野葡萄」や依頼で作曲した二、三曲がある。

現在のコンクールは、昔のことを考えると今昔の感に堪えぬ盛況ぶりだが、ここまでくるにはいろいろのことがあった。

コンクールの功罪については、これまで何回となくジャーナリズムで取り上げられ、論議されてきた。しかし、コンクールは功か罪かについては、今もってどちらとも采配があがっていない。讃める人もあれば、けなす人もある。また無関心な人もある。したがって連盟の会員であって、参加する合唱団もあれば、絶対に参加しないという指揮者もある。コンクールがあるから、何でもかでも参加しなくてはということもない。かたくなに拒否するといって非難することもない。

参加することでグループの意気があがり上位に入賞したり、もちろん優勝でもすれば、その合唱団は一挙にメンバーがふえ、日ごろの活躍が大いに活発になるなら、こんなけっこうなことはない。逆に力及ばず下位に低迷したりすれば、げんなりとなり、グループ自身もしぼんでゆくということもあろう。しかし、今一度奮起して次の年をねらうということにでもなれば、これまたコンクールの功といえる。

オリンピックではないが、「コンクールは参加することに意義がある」と力んでみたところで所詮は空念仏でしかないと思う。参加するからには、よい成績をとりたいとねがうのが人情で、勝敗などはどうでもよいと揚言するのはうそであろう。

実際、コンクールに出場する合唱団は、指揮者もメンバーも、何か月か前から、課題曲と自由曲の二曲に取り組み、合唱技術の向上はめざましく、ステージに立った時は、すくなくともその合唱団としては最も高い水準に達しているはずだし、舞台でのふるえるような緊張感は、なにものにもかえがたい体験というべきで、私はその十分か十五分かの音楽的な高揚は貴重ではないかと思う。そして、そういう時間を持ちえたということに充足感を味わうならば、そのときはじめて、勝ち敗けを度外視することの正当性があると思う。

コンクールたけなわの秋である。大いに練習にはげみ、力をつくして、コンクールを楽しもうではないか。

敗けたらはずかしい、面目まるつぶれだと思う気持は、指揮者がだれよりも強い。だからある意味では指揮者の心情が、参加するか参加しないかを決める。私はコンクールに功罪があり、うらとおもてがあると思うが、功の方が罪を上まわっていると信じている。今日の合唱の向上隆盛をもたらした重要な因子の一つであったと信じている。